



TITLE:

イギリス金融資本の成立(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

生川, 榮治

---

CITATION:

生川, 榮治. イギリス金融資本の成立. 京都大学, 1964, 経済学博士

ISSUE DATE:

1964-06-23

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/211297>

RIGHT:

【 12 】

氏名	生 川 榮 治 いく かわ えい じ
学位の種類	経済学博士
学位記番号	論経博第3号
学位授与の日付	昭和39年6月23日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	イギリス金融資本の成立

論文調査委員 (主査) 教授 中谷 實 教授 岸本誠二郎 教授 豊崎 稔

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は六つの章にわたる研究に序論と結びとを附加したもので、全巻384頁より成り、さらに13頁に及ぶ索引が添加せられている。

序論 金融資本の概念

資本主義社会の現段階では、銀行の支配力が大きいために、金融資本とは銀行資本であるという誤解を生じやすい。金融資本の概念は、独占下における銀行と産業との融合関係を強調する方向に発展してきたが、その中でも、銀行の優位を強調するものや銀行権力の後退を説くものがある。著者は、これら諸説の検討を通じて、金融資本の形成に必要な一要点が、銀行に固有な社会関係の集約機能にあることを明らかにした。そしてイギリスでは、金融資本の外形的構造が特殊であるけれども、発展の一般法則性を基底としてその特殊性が解明されるべき必要を論じている。

第一章 工業金融の展開過程

著者によれば、一国における金融資本形成の構造的特質をつかむためには、産業資本集中過程における構造的特質と、企業金融過程の構造的特質とを、統一的に理解することが前提条件となる。そこで本章では、自由競争期から独占期に移る過程におけるイギリス工業金融の展開の条件として、株式会社制度の発展を究明した。

第二章 産業集中の金融的構造

本章では、イギリスにおける金融資本関係の基底をなすところの産業独占構造の特質を、近代株式会社制度のもとで把握する。すなわちまず、イギリスにおける初期の産業独占はドイツのそれに比して比重が低いこと、およびその独占構造が資本化問題に矛盾と弱さを集中的に表現していることを明らかにしたのち、株式会社の展開による産業集中やトラスト形態の結成を媒介として、銀行が産業と有効に結合体制をととのえてきた事情を分析している。

第三章 預金銀行と工業金融

イギリスの預金銀行は短期の金融を原則とするから、工業金融には関与しえないというのが通説である。けれども著者は本章で、下記の三つの点を論じて、預金銀行のもとで産業と銀行との融合関係を抽出しようとしている。第一点としては、大銀行が、ロンドン市場での流動的な短期運用を拠点にしなが、地方では工業融資によって収益性を高めていることを指摘する。第二点としては、銀行が当座貸越によって、工業企業が有価証券を発行するまでの間、中間的に架橋することを指摘する。そして第三には、13の大株式銀行がロンドン手形交換所において独占的地位を確保し、さらに人的関係においても、独占企業や流通部面での大企業と結合している事情を説明するのである。

#### 第四章 国内投資の市場

イギリスの資本市場は海外投資を主力とし、国内産業投資は部分的なものであるけれども、本章ではまず、この部分的な株式流通市場が全体系の一環として成長展開する事情を明らかにする。そして流通市場を背後から規制する発行市場に関して、アンダーライティングが、各種金融機関を結集して体系化する地盤であることを明らかにし、さらに、銀行の証券担保金融が、アンダーライティングによる集中体系に運動の動力を与えるものと説明する。このようにして、資本市場における諸機関の関係が序列体系的に解明せられているのである。

#### 第五章 海外投資の金融機構

ここではまず、資本市場の主力をなすマーチャント・バンカーの業態分析を行なって、アンダーライティングの中核としてそれが行なう特有の資金動員力を説明しながら、イギリスの海外投資が産業資本よりもむしろ貸付資本の輸出という形態をとることを述べる。そして、どのような形態をとるにせよ、つねにシティと連結しながら支配関係を確立することを明らかにすることによって、金融資本としての性格を与えられることを強調するのである。

#### 第六章 貨幣市場と資本市場

本章は、これまで別個に取り扱ってきた貨幣市場の中核たる預金銀行と、資本市場の頂点に立つマーチャント・バンカーとの対抗および結合関係を総合的に分析して、イギリス金融資本のバック・ボーンを検出しようとするものである。すなわち、預金銀行の社会的性格とマーチャント・バンカーの個人的性格とが、互いに対抗する基盤をなしながらも、英蘭銀行を頂点として両市場を通ずる流動性の展開において、両者が相互依存関係を形成している事情を開明しているのである。

#### 結 び

この論文の総体的結論を与えているが、要するに、預金銀行とマーチャント・バンカーとが、貨幣市場と資本市場の交流を相互に支配することによって市場を再編成し、そこから生れる巨大な集中体系が産業独占を包みこむことによって、金融資本としての歴史的な性格が与えられる、というのである。

### 論文審査の結果の要旨

資本主義社会に金融資本が確立する過程は、ドイツにおいて最も明確に現われたのであるが、イギリスでは、これが金融の表面に現われなかったから、従来、イギリスにおける金融資本の確立については、満足すべき論証が与えられなかった。著者は、その原因が、金融資本としての性格を外面的・形式的に捉え

よとする従来の分析態度にあるとし、イギリスでは、全体的な構造分析によってのみ金融資本の確立が明らかにせられるという観点に立った。

もちろんイギリスでも、第一次大戦後、とくに1930年代になると、金融資本の一般的傾向とせられる諸種の徴候が表面化してきたから、多くの人は、イギリスにおける金融資本化を認めるにしても、それが時期的に立遅れていることを強調するのである。ところが著者は、上に述べたような全体的な構造分析によって、第一次大戦以前のイギリスにおいても、その特殊な様相の中に金融資本化した社会関係の実体が捉えられるとの信念から、「論文内容の要旨」として記したような分析を試みている。しかも、金融資本化は一般にドイツにおいて典型的に現われたと見られるから、著者は論述の過程において、つねにドイツ金融資本の特質とせられている諸点をとりあげ、これと対比することを怠らないのである。

かくて分析の結果、イギリスにおいても金融資本化は、特殊的な形態においてではあるが、すでに第一次大戦前に存在することを論証し、資本主義経済の歴史的発展法則が、イギリスにおいても自己を貫徹していることを論証しようとするのである。

その研究態度は真面目であって器用さに頼ろうとするところがなく、定評ある文献は可能なかぎりを利用して、計数的資料も広く集められている。従って研究成果についても高い評価が与えられるものと考えられるのである。

もちろん望蜀の観点から、欠点を求めるならば、論述の技巧・資料の蒐集・整備・論断の慎重性等について、あるいは不満の点が認められるかもしれないが、わが国においてこの種の研究の完璧を期することは至難のことに属するのみならず、この領域での研究が、著者の努力によって一段と推進せられた功績は多大である。

よって本論文は経済学博士の学位論文として価値あるものと認める。